村田沙耶香とジェンダー・クィア
――『コンビニ人間』、『地球星人』、その他の創作

飯田 祐子

1. ジェンダーとクィア

「ジェンダー・クィア」は、トランスジェンダーの運動・理論の中から生まれた用語である。クィアという用語は、主としてセクシュアリティに関わる領域で、その多様性を可視化し異性愛中心主義を撃つために用いられてきたが、ジェンダー・クィアという語は、クイアという積極的な逸脱性をジェンダーに付し、ジェンダーに関わる多様性そのものを主張する。

LGBTという四つの代表的なセクシュアルマイノリティを結び合わせた用語の普及は、ジェンダーとセクシュアリティの多様性が認知されるのに大きな役割を果たしてきたが、ジェンダーとセクシュアリティそれぞれへの関心の熱量をみれば、「L」と「G」と「B」はそもそも性的指向の特徴にもとづいて作られたカテゴリーであるため、その議論の関心は、ジェンダーよりもセクシュアリティにおける多様性に向けられてきたといえる。異性愛という規範におさまらない多様な性愛の形が問題にされてきたが、なかでも男と男あるいは女と女という同性間の性的指向に基づく関係については、結婚など法的な家族制度の見直しも含めて議論されてきた。一方、「T」を指すトランスジェンダー[1]についていえば、性的指向よりもジェンダーアイデンティティやまたそれと身体との関係が問題化されきたといってよいだろう。生物学的な身体の特徴や割り当てられたジェンダーと、ジェンダーアイデンティティとの違和に対してどのように応じていくかという問題が、医療の領域での判断や方法を含んで、検討されてきた。

その際のジェンダーについての考え方は、大きく分ければ二つある。一つには、トランス女性を女性として、トランス男性を男性として、社会的承認を求める考え方がある。その意味で「男」と「女」という二元的なジェンダーシステムに則って、シスジェンダーとの非対称性、トランスの人々への差別の解消を目指す方向性である。2018年においても、フェミニストを自称する人々によるトランス女性に対する否定的ツイートが広まり、対抗的にトランス女性への連帯を表明する「#トランス女性は女性です」「#トランス女性もシス女性も女性です」というタグがつくられるという事態が生じたように、トランス女性／男性への差別は、シス女性／男性との差異化によって発生する。

1
トランスジェンダーの定義については、森山至貴の整理を前提としている。森山は、「現在の（広義の）トランスジェンダー概念」は、「同性愛」と差異化し、トランスセクシュアル・トランスベスタイト・トランスジェンダーという「割り当てられた「性別」と異なる性別を生きる経験に対する適切な名称を発明し、積み重ねる形で」つくられたとしている。（『ＬＧＢＴを読み解く　クィア・スタディーズ入門』ちくま新書、2017年、101頁）

それゆえ、トランス女性は女性であるという主張は、差別への抵抗のフレーズとなり得る。社会の構造や制度が、二元的なジェンダーシステムによって設計されている現状においては、シスジェンダーであっても、トランスジェンダーであっても、様々な状況におけるジェンダー化の際に、当事者のアイデンティティに叶ったジェンダーで認知されることは、生きて行く環境の質に関わる重要事である。それが可能になるように私たちの認識と社会の設計を変えることが必要であることは間違いない。

とはいえ、トランスの人々のジェンダーアイデンティティが、常に二元的に形成されているのかといえば、必ずしもそうではない。石井由香理は「アクチュアル・アイデンティティ」という用語で、当事者のアイデンティティが「女」や「男」や「性同一性障害」といった既存のカテゴリーのどれともずれており、「明確で一貫した、永続的な自己像として現れてはいない」[2]ことを指摘している。二つ目の方向性は、アイデンティティをそのように変化するものとしてとらえるもので、トランス女性／男性を、女性として男性として承認するということではなく、トランス女性／男性は「女」なのか「男」なのかという問い自体を超えることが目指されることになる。ケイト・ボーンスタインは「ジェンダー・アウトロー」という概念を提示している[3]。ボーンスタインは、「男なの？　女なの？」という問いには「イエス」と答えるという。「ジェンダーは流動的なもの」だからである。「ジェンダーの流動性とは、かかる時間を問わず、また変化の程度を問わず、自由に、自覚的に、無限に存在するジェンダーの中からひとつ、あるいは複数のそれを選ぶ能力のことである」[4]とボーンスタインはいう。「ジェンダー・アウトロー」は、トランスジェンダーの政治学を、ジェンダー二元論への抵抗の足場としてより広くとらえることを可能にする概念である。

ジェンダーの二元性に対する二つの立場は現在もともに存在しているが、大きな流れとしては、前者から後者へと展開してきたといえる[5]。リキ・ウィルキンスは、1990年代に、トランスジェンダーの運動に新しい世代を見出し「ジェンダー・クィア」という用語でそれを語った[6]。「ジェンダー・クィア」は、「ジェンダー・アウトロー」と同様に後者の流れの中から生まれ、トランスジェンダーだけでなくクロスドレッサーやインターセックスやドラァグなどを広く総称する用語であり、差異を含んだ連帯のなかで、ジェンダーの二元的システムそのものを解体する方向性を提示する。ウィルキンスは、ジュディス・バトラーの『ジェンダー・トラブル』[7]と出会ったことによって、トランスジェンダーのアイデンティティをめぐる困難をとらえ直したという[8]。ジェンダーをパフォーマティブに構築されたものとして考えるバトラーの議論は、ジェンダーの二元論を終着点としない世界へ私たちを連れだす。クィアという用語が持つ規範に対する積極的な逸脱性は、性的指向に関わる文脈では異性愛

2
石井由香里『トランジェンダーと現代社会　多様化する性とあいまいな自己像をもつ人たちの生活世界』明石書店、2018年、79頁。

3
ケイト・ボーンスタイン『隠されたジェンダー』原著1994年、筒井真樹子訳、新水社、2007年。

4
同書、63頁。

5
同書。パトリック・カリフィア「セックス・チェンジズ　トランスジェンダーの政治学」原著1997年、『セックス・チェンジズ　トランスジェンダーの政治学』石倉由・吉池祥子ほか訳、作品社、2005年。

6
Joan Nestle, and Clare Howell, and Riki Wilchins (ed.), *Gender Queer: Voices from beyond the Sexual Binary*, Los Angeles, Alyson Books, 2002.

7
ジュディス・バトラー『ジェンダー・トラブル　フェミニズムとアイデンティティの攪乱』原著1990年、竹村和子訳、青土社、1999年。

8
Riki Wilchins, Burn the Binary!: *Selected writing on the politics of being Trans, Genderqueer and Nonbinary*, New York, Riverdale Avenue Books, 2017.

中心主義を、ジェンダーに関わる文脈では男と女の二元主義を侵犯する力と可能性を呼び起こす。

本稿で取り上げる村田沙耶香は、トランスジェンダーの問題を中心的に扱ってきたわけではないが、ジェンダーの二元性について、さまざまな形で鮮明に問題化してきた作家である。トランスジェンダー、あるいはジェンダーのトランスを試みる登場人物も書かれているが、同時に重要なのは、身体とアイデンティティの組み合わせにおいてはシスジェンダーに振り分けられる人物でありながら、激しくジェンダーシステムから逸脱した存在が描かれていることである。身体とジェンダーの関係や性的指向がマイノリティとしてカテゴライズされる場合でなくとも、ジェンダーシステムへの違和は発生しうるということを、村田沙耶香の小説群は示している。また、近未来的な社会を描いた作品では、性行為から生殖に至るジェンダー役割の組み替えや破壊がなされ、性別のない空間や、「人間」というアイデンティティを破棄する世界も描かれてきた。その世界は、ジェンダー規範への鋭い攻撃性とオルタナティブの創造という点で、ジェンダー・クィアという用語と共鳴すると思われる。ここでは、村田沙耶香の作品群を通して、その多様性について考えてみたい。村田は小説という虚構の形式を通して、規範的なジェンダーからの逸脱を、果敢に、執拗に、圧倒的な想像力を用いて試み続けている。村田沙耶香の強靱な想像力によって作り出された様々なジェンダー・クィアネスの跡をたどる作業によって、二元的なジェンダーシステムの抑圧をはっきりと浮かび上がらせるとともに、ジェンダーの流動性と複数性に向かって足を進めてみたい。

2. クィアネスの寓意的表象:『コンビニ人間』

芥川賞を受賞した『コンビニ人間』[9]は、村田の規範や制度に対する徹底した違和感が、リアリズムの範疇におさまるようにして示された作品である。道具立てがリアルで、現実との繋がりが濃厚なこの作品から、始めたい。

受賞時の選評[10]では「異物を排除する正常さの暴力をあぶり出す」(堀江敏幸)、「社会的異物である主人公を、人工的に正常化したコンビニの箱の中に立たせた時、外の世界にいる人々の怪しさが生々しく見えてくる」(小川洋子)と評価された。逆に、村田の作品の尖った部分に目を向けずに読んだ評者は、「「コンビニ」という、どこにでも存在して、誰もが知っている場所で生きる人々を厳密に描写することに挑戦し、勝利した」(村上龍)、「職場というものが、その仕事への好悪とはべつに、そこで働く人間の意識下に与える何物かを形づくっていくさまを(略)、肩肘張らずに小説化してみせた」(宮本輝)と

9
『コンビニ人間』。初出『文学界』70-6、2016年6月。単行本『コンビニ人間』文藝春秋、2016年。引用は、単行本による。

10
「芥川賞選評」『文藝春秋』94-13、2016年9月。

まとめており、普遍的で日常的な現代社会の問題を描いた作品としての評価も可能である。それゆえ広い支持を得て受賞に至ったのだとも言えるだろうが、やはりこの作で最も興味深いのは、「正常」の抑圧性を鮮明過ぎるほど鮮明に浮き彫りにし、「社会」から完全に切り出された存在を描いた点である。

主人公の古倉恵子は、コンビニでバイトをしている三十代独身の女性である。彼女は、暗黙のうちに共有されている社会の規範を理解しない人物として登場する。幼い頃のエピソードを一つあげよう。古倉は、公園で死んでいた小鳥を見て「お父さん、焼き鳥好きだから、今日、これを焼いて食べよう」[11]と言って、周囲にショックを与える。小鳥の肉と食用の鳥肉を区別しない古倉に、大人たちは、小鳥は花を添えて埋葬すべきものであるということを教えようとする。同じ鳥なのに、なぜ一方は賞翫の対象となって食べることを許されず一方は食べられるのかという、幼い古倉が口に出さなかった問いは、線引きの恣意性を浮かび上がらせる。また同時に注意しておきたいのは、前者は死後手厚く葬られ、後者は躊躇なく殺されるのだが、古倉が前者に価値を与えているわけではないことである。古倉の肯定的な評価は、むしろ後者の食べられる存在の方に向けられている。埋葬されるものが大切な存在で、埋葬されないものはそうではないという文化的に構築された価値基準を、古倉は共有しない。

古倉恵子の特殊性は、社会の文化的規範の外側にいるということにある。そのことは、古倉恵子を「異物」化、つまりクィア化する。周囲との摩擦を最小限に留めるため、古倉は「皆の真似をするか、誰かの指示に従うか、どちらかにして、自ら動くのは一切やめ」[12]ることで生き延びていく。そうして発見した最も安全な場所が、コンビニである。コンビニには、細部まで明文化されたマニュアルがある。それを正確に守ることで、彼女は場所を得る。「そのとき、私は、初めて、世界の部品になることができたのだった。私は、今、自分が生まれたと思った。世界の正常な部品としての私が、この日、確かに誕生したのだった」[13]という。「店員」になることで「世界の歯車」に、「正常な人間」[14]になるのである。

クィアネスは単なる逸脱ではない。規範に対する批評性が付されていることが重要である。「正常」から完全に逸脱している彼女は、「正常」に抵抗するのではなく、むしろなんとかして「正常」の枠に収まろうとしており、一見、制度に従順な人物にみえる。しかしながら、「正常」に対する彼女の洞察には、差別の構造への批評性が託されている。たとえば彼女は、同性愛やアセクシャルについてカミングアウトも難しいらしいとテレビで見たと気楽に発言する友人たちに対して、「たとえ本当にそうだとしても、皆が言うようなわかりやすい形の苦悩とは限らないのに、誰もそこまで考えようとはしない。そのほうが自分たちにとってわかりやすいからそういうことにしたい、と言わ

11
『コンビニ人間』、8頁。

12
同書、12頁。

13
同書、20頁。

14
同書、22頁。

れている気がした」[15]と想像力と共感の欠落を感じ、また「差別する人には私から見ると二種類あって、差別への衝動や欲望を内部に持っている人と、どこかで聞いたことを受け売りして、何も考えずに差別用語を連発しているだけの人だ」[16]というように、差別の様相を繊細に分析してみせる。クィアな古倉恵子の目を通して、「正常」の構造と暴力性が言語化されるのである。彼女自身は、「正常」の枠からの逸脱が可視化されないよう、コンビニに身を隠す。コンビニは「ゆるぎない正常な世界」[17]という寓意的空間である。マニュアルによる管理が行き渡った「強制的に正常化される場所」は逸脱する者を「修復」する[18]。コンビニは、そうした構造が明瞭に示された空間である。徹底的に管理された場所では規範の遵守が容易である。完結した世界は、彼女を安心させる。

幼い頃から変わらず「正常」を共有せずに過ごしてきた古倉であるが、幼時との差異は、成人のための「正常」が、強固にジェンダー化されていることにある。ジェンダーと、それと連動したセクシュアリティについての規範は、大人の彼女を放ってはおかない。

たとえば、古い友人達とバーベキューに行った古倉は、独身であることを話題にされ、なぜ結婚しなければならないのかと邪気なく問うてしまう。周囲の冷たい雰囲気を感じた古倉を語る次の一節は、規範からの逸脱が引き起こす事態を語っている。

> 正常な世界はとても強引だから、異物は静かに削除される。まっとうでない人間は処理されていく。／そうか、だから治らなくてはならないんだ。治らないと、正常な人達に削除されるんだ。／家族がどうしてあんなに私を治そうとしてくれているのか、やっとわかったような気がした。[19]

古倉恵子によって最も強調されているのは、「正常」はつねに排除とともにあり、排除によって維持されているということである。

家族は、古倉の矯正を、最も強く望む存在である。家族は「正常」の基盤であるからだ。家族という制度は、異性愛関係を基軸にして男と女の二元的な性別役割分業によって構成される共同体を「正常」とする。それは、ジェンダーとセクシュアリティのあり方を単一化し、私たちの身体を管理し社会化する統合的な制度である。結婚は、もちろんその要となる要素である。男と女が番って生殖を行い、再生産を担う。「正常」の核には、ジェンダーとセクシュアリティを連動させた家族の制度があり、彼女の異質さは、家族の文脈において最もあからさまにあぶり出されてしまう。

この小説には、逸脱者がもう一人描かれている。コンビニの新たな店員として登場する白羽という男である。白羽は「婚活」のためバイトに来たと公言し、勤務態度の悪さですぐに辞めさせられる。「この世界は、縄文時代と

15 同書、37頁。

16 同書、64頁。

17 同書、31頁。

18 同書、67頁。

19 同書、77頁。

変わっていない」「ムラのためにならない人間は削除されていく」[20]と考える白羽は、いわゆる社会的な成功から落伍して、「ムラ」のあり方に憎悪を抱いている。古倉と違うのは、規範を内面化しているという点である。古倉は、内面化していないために、排除される危険を察知はしていても、葛藤や劣等感から自由であるが、白羽はそうではない。内面化しているからこそムラを憎悪し、逃亡を願望するのである。彼が考えた逃亡の方法は、結婚である。「僕は結婚をして、あいつらに文句を言われない人生になりたい」[21]と白羽はいう。結婚は、「ムラ」の中で存在を承認されるために必要な資格となるからだ。白羽は、結婚することで、他の要件からの逃亡を許されようとする。

小説後半で展開する古倉と白羽との関係は、(私たちの現実を背景として書かれているという意味で)リアリズムの内側で描かれながらも、村田作品に特有のクィアなものである。古倉は白羽に、婚姻だけが目的なら自分と婚姻届を出すのはどうかと提案する。というのも、彼女もまた二週間で14回「何で結婚しないの?」と問われ、「何でアルバイトなの?」と12回問われるという具合に干渉され続けているからである。「皆が不思議がる部分を、自分の人生から消去」[22]するための工夫である。しかしながら「婚姻」という名のもとになされる二人の関係は、「婚姻」の概念から著しくずれている。白羽は古倉の部屋に住むことになるが、婚姻にまつわる意味も物語も関心も持たない彼女は、彼を浴室に住まわせ、もちろん性交など行わず、餌としてゆでた野菜を与える。ムラにおける糾弾に疲労しているという白羽は、想定外の扱いに驚きながらも、匿われることだけを望んでその生活を受け入れていく。ここに描かれているのは、明らかにムラの「正常」から逸脱した、クィアな関係である。

この作品では、セクシュアリティは消されている。もともと「性経験はないものの、自分のセクシャリティを特に意識したこともない」、「性に無頓着なだけで、特に悩んだことはなかった」[23]古倉にとって、「交尾」とも形容される「性交」をするのは「不気味で気が進まなかった」[24]という具合に、性的指向や欲望のオルタナティブを探る契機もないままに丸ごとセクシュアリティは退けられている。村田の作品には、セクシュアリティを消去する系列[25]と、オルタナティブなセックスが模索される系列(次節で論じる)があるが、『コンビニ人間』は前者である。他者との関係性についても、古倉と白羽の関係は、消去できるものをひたすら消去する方向で描かれている。ミニマムな関係性が、ムラの「正常」を反照する。

結婚は「正常」な人々が群がる話題であり、古倉恵子と白羽の関係は干渉から遁れ得ない。家族との摩擦は、一気に大きくなる。コンビニの同僚も同様で、二人の結婚は格好のゴシップのネタになる。干渉の矛先は古倉のアルバイトという立場にも及び、ついにコンビニのアルバイトを辞め定職を探さねばならなくなる。

20
同書、84頁。

21
同書、83頁。

22
同書、88頁。

23
同書、37頁。

24
同書、142頁。

25
『殺人出産』(初出『群像』69-5、2014年5月。単行本『殺人出産』講談社、2014年)や『消滅世界』(初出『文藝』54-3、2015年。単行本『消滅世界』河出書房新社、2015年)など。

小説の最後、古倉のクィアネスは一気に鮮明化する。コンビニから切り離されるという危機のなかで、彼女は、自分が「人間である以上にコンビニ店員」であること、「細胞全部がコンビニのために存在している」のだということ、「コンビニ店員という動物」という「本能」を裏切ることはでき」ないという認識を得る[26]。「人間」であることも消去され、「動物」という枠組みを経由して「非−人間」的存在へと変成するのである。彼女は白羽に「コンビニ店員という動物である私にとっては、あなたはまったく必要ないんです」[27]と言い渡す。「コンビニ人間」は、結婚や家族や性的欲望や愛などという制度的要素をすべて消去する、過激で不穏な寓意的存在である。

26
同書、149–150頁。

27
同書、150頁。

3. オルタナティブを作り出す

『コンビニ人間』はジェンダー化したセクシュアリティを消去する作品であったが、次に、もう一つの系列、セクシュアリティにおけるオルタナティブを模索する作品群に目を向けたい。

初期作品から継続して書かれてきたのは、モノを欲望の対象とする物語である。「コイビト」[28]には、ホシオと名付けられたぬいぐるみと生きている「あたし」の世界が描かれている。「ギンイロノウタ」[29]の土屋有里はステッキ、また「タダイマトビラ」[30]の恵奈はカーテンとの関係を生み出している。モノは少女たちのセクシュアルな欲望を受け止める。ぬいぐるみのホシオに舌をからませるとき、ステッキを抱いて足を閉じるとき、カーテンに包まれ愛撫されるとき、少女たちは、自らの欲望を既存の物語に汚されることなく味わうことができる。モノは、そのような自慰に彼女たちを導く。

> たとえば自慰の才能があって、自分の性欲を完全に満たすことができる人間は、わざわざ他人との人間関係なんていらないんじゃないか。わたしはホシオをポケットにいれてさえいれば、誰もいない海の上に一人で浮かんでいたって、少しもさびしく無く生きていける。それどころか誰にも邪魔されずに思う存分満たされ続けることができるだろう[31]。

> 「オナニーをしよ、ニナオ」／私は風に揺れ始めたニナオを見上げて小さく呟いた。正確には、私が「カゾクヨナニー」と名付けている行為だ。／「ニナオ。ね、ほら、オナニーだよ」／さらに呼びかけると、ニナオはまるで私の声に応じるように風に膨らみ始めた。／ニナオは、オナニーのパートナーだからという理由で私がそう呼んでいるカーテンの名前だ。空が溶け落ちてそのまま部屋に流れ込んできたような淡い水色をした、つるつるとしたナイロン素材のニナオは、光を透かせ風によく揺れる[32]。

28
「コイビト」。初出『群像』58-14、2003年12月。単行本所収『授乳』講談社、2005年。文庫『授乳』講談社、2010年。引用は、文庫による。

29
「ギンイロノウタ」。初出『新潮』105-7、2018年7月。単行本所収『ギンイロノウタ』新潮社、2008年。文庫『ギンイロノウタ』講談社、2014年。引用は、文庫による。

30
「タダイマトビラ」。初出『新潮』108-8、2011年8月。単行本『タダイマトビラ』新潮社、2012年。文庫『タダイマトビラ』新潮社、2016年。引用は、文庫による。

31
「コイビト」、74頁。

32
「タダイマトビラ」、16–17頁。

自慰といえば、男性性と連動して論じられてきたオナニズムの議論が思い出されるが[33]、ここにおける少女たちの自慰は、オナニズムが関係への欲望を欠いたものであるのと対照的に、時間をかけて作り出されたモノとの特別な関係の中に置かれている。それは、フェティシズム[34]とも異なるものだ。フェティシズムは、欲望の対象となるモノとの間に一対一の関係を結んだりはしない。靴であれ、足であれ、欲望の対象はカテゴリーとして形成される。一方、少女たちにとってこれらのモノは、ともに世界をつくり出すパートナーである。名付けられ、固有の関係が結ばれており、人とモノの境界が消されている。

村田が描く欲望の風景を、オナニズムやフェティシズムのバリエーションの一つとして論じることには意味がないだろう。ここでもやはり重要なのは、その背景に、ジェンダー規範への違和があるということだからだ。繰り返し起点として指さされるジェンダー規範の抑圧性からの脱走の具体的な過程として、これらの物語は描かれている。オナニズムやフェティシズムは、その途中におかれたバリエーションであって、それ自体が追求されているわけではない。見落としてはならないのは、少女たちには身体から発した欲望があるということである。少女たちには性欲がある。しかしながら、ジェンダー化された既存の性行為は、少女たちを疎外する。それゆえ彼女たちは、自分の身体が帯びる欲望を救い出す空間を自分で作り出そうとするのである。性的に記号化されていないモノは、少女たちの欲望の流れを遮ることがない。モノとの関係が、彼女たちに自由に与えるのである。

自慰は、ジェンダー規範の干渉を退けた身体実践であり、モノを必要としない形でも追求されている。「星が吸う水」[35]の主人公は、「勃起」し「夢精」する鶴子である。それらの用語が男性の身体的経験を語るものであることが示すように、二元的なジェンダーの組み替えが企てられている作品でもあるが、鶴子は果敢に自らの身体と欲望の回路を広げ、夢を見ながら達する「性の理論にまだ汚されていない絶頂、儀式としての性行為のどこにも組み込まれていない絶頂」[36]を経験する。ただし、それを誰にも話すことはできないという。なぜなら、「絶頂は、それ自体がいくら無垢なものであっても、外気にさらした瞬間、あっという間にいろんな理論や、脳から生えたねばついた手が伸びてきて、汚されてしまう」[37]からだ。既存の性行為への違和が、つねに物語の出発点となる。規範からの脱出を試行する鶴子の「性指向はまだ作り途中」で「異性愛か両性愛か、まだ制作中」[38]である。

自慰ではなく二人で行う行為を主題としてオルタナティブが模索されているのは、「ガマズミ航海」[39]である。性行為を「本物のセックス」と「そうではないもの」に分けている結真と、「恋愛ではない場所で飢餓感を、たとえば空腹とか睡眠欲とかと同じ、生理現象の一つとして、冷静医、合理的に、処理」し

33
金塚貞文『オナニスト宣言　性的欲望なんていらない!』青弓社、1992年。

34
ここでいうフェティシズムとは性的フェティシズムを指す。田中雅一「フェティシズム研究の課題と展望」(『フェティシズム研究1　フェティシズム論の系譜と展望』京都大学学術出版会、2009年)など参照。

35
「星が吸う水」。初出『群像』64-3、2009年3月。単行本『星が吸う水』講談社、2010年。文庫『星が吸う水』講談社、2013年。引用は、文庫による。

36
同書、68頁。

37
同書、70頁。

38
同書、74頁。

39
「ガマズミ航海」。初出『群像』64-12、2009年8月。単行本所収『星が吸う水』講談社、2010年。文庫『星が吸う水』講談社、2013年。引用は、文庫による。

たい美紀子は、「性行為ではない肉体関係」を求めて実験を試みる[40]。二人は、目指す新たな肉体関係に、「結合」という花言葉を持つ「ガマズミ」という名を付し、器官としては膣を選んで実験を重ねるうち、互いが「皮膚で区切られた」「宇宙のかけら」だと感じられる世界に達する[41]。残念なことにその感覚は次の機会には再現できず、実験は失敗に終わるのだが、出口はどこかにあると感じさせる物語になっている。

「宇宙」は、村田作品における脱出口の鍵である。「星が吸う水」にも、類似の模索が組み込まれている。鶴子には二人の友人がいる。一人はジェンダー規範を受け入れている梓で、もう一人は「恋愛感情や性欲を持たない体質」[42]の志保である。志保は、自分を「星の欠片」としてとらえている。小説の終盤で、「地球とのセックス」というアイデアを得た鶴子は、「梓の中にある辞書の、セックスという言葉の意味」を「崩壊」させるべく[43]、大切に育ててきた自慰の感覚を頼りに目に見えない何かを地球に放出しようとするのだが、成功はしない。

「星が吸う水」の世界は『ハコブネ』[44]に引き継がれる。『ハコブネ』にも三人の女性が登場する。ジェンダー規範への違和を抱えた鶴子に近いのは、里帆である。里帆は「本当に好きな人としかセックスをしたことがないのに、肌に直接触れられた瞬間にセックスが拷問に変わってしまう」[45]という19歳の女の子で、「自分の意志でもう一度第二次性徴をやりなお」[46]すことを目論む。胸のふくらみを圧迫して隠すタンクトップを身につけるなど、「女性」であることを積極的に変更しようとするが、男性になって女性とセックスしようとしてうまくいかず、女性のまま女性とセックスしようとしてもうまくいかない。「大好きな人と性別を脱ぎたい」[47]という願いの輪郭がはっきりしていくだけで、それが達成されることはない。

そうした里帆を批判する位置に配されているのは、「星が吸う水」の梓に近い椿というシスジェンダーの女性で、セックスが辛いのは「あなたがちゃんと、女をやっていないからじゃない?」[48]と里帆を責め、里帆が探している「新しいセックス」など「誰も乗らないノアの箱船」[49]だという。生きづらさを認めないわけではなくとも、規範に折り合うことを成熟と考える立場は、規範を再生産することになる。梓が示す社会への適応性が羨望される箇所もあり、梓のようなあり方は単に否定されているだけではないが、その抑圧性について、ここで多くを語る必要はないだろう[50]。

この作品で新しい世界を拓くという意味で最も重要な人物は、「星が吸う水」の志保を引き継ぎ、「星の欠片」というアイデンティティをはっきりと選ぶ知佳子である。里帆の物語にとっても、最後の一歩のための契機をつくるのは、知佳子である。里帆を苦しめているのは「男と女、どっちかしかないっていう先入観」ではないか、「性別ってもっと柔らかいもの」ではと問いかけ[51]、

40
同書、150頁。

41
同書、216頁。

42
「星が吸う水」、112頁。

43
同書、120頁。

44
『ハコブネ』。初出『すばる』32-10、2010年1月。単行本『ハコブネ』集英社、2011年。文庫『ハコブネ』集英社、2016年。引用は、文庫による。

45
同書、8頁。

46
同書、23頁。

47
同書、124頁。

48
同書、111頁。

49
同書、135頁。

50
小説の構成も、里帆と知佳子のパートが交互に繰り返されており、二人が主要な登場人物といえる。

51
『ハコブネ』、118頁。

また「人間が相手じゃなきゃいけない決まりはないじゃん。クッションとだって、きっとセックスできるよ」[52]と知佳子はいう。里帆は、知佳子のアイディアを実践し、モノとセックスすることで自由になるあの少女たちに仲間入りする。モノとのセックスは、里帆の物語の行き先を開く。「記号としての男や女の身体」から解放されて「ただ、肉体そのものとして愛し合う」[53]ことへと、導かれるように視線を移し、里帆の物語は語り終えられることになる[54]。

『ハコブネ』の最終部分に置かれているのは、知佳子の物語である。「星が吸う水」では成功しなかった地球とのセックスが、今一度試行され、『ハコブネ』ではその感覚の広がりが記述されている。「物体として、アースと強い物体感覚で繋がる」ことで、「身体に残る、微かな人間としての肉体感覚を消滅させ」[55]という知佳子の視点において重要なのは、「生物である以前に自分は物質なのだという当たり前のこと」[56]である。人間は、地球上の物質からできている。ある期間、その物質の集合体が人間の形態をしているというだけで、死後はまた物質の水準に分解されていくものである。水素や炭素や酸素や窒素などの人を構成していた物質が、分解後に他の生物が再構成されることもあるだろうし、再び人間の一部に組み込まれることもあるだろう。生物である以前に物質という認識は、たしかに「当たり前のこと」である。知佳子の物語がユニークなのは、「物体としての自分の中に、人間としての肉体感覚と、星としての感触がゆらめいている」なかから、「星であることを、はっきりと選ぼう」という意思である[57]。そして、彼女は星として星とのセックスを試みる。土に触れ、身体から流れ出る水を染み込ませ、地球の熱に自らの熱を重ねていく。ラストシーンを引用しよう。

> 知佳子は地表と一体になっていた。指先が土に触れ、目を閉じたまま、知佳子はそれを握り締めた。湿った感触に、まるで手を繋いで眠る恋人同士のようだと思いながら、寝息のような深呼吸を繰り返した、知佳子から押し出される風が、闇に融けて、ゆっくりと星の上を流れていった[58]。

人としてのセックスからついに離脱するその感覚はどのようなものなのか。知佳子と星という「二つの欠片」が溶け合うとき、「知佳子は星になってどこまでも続いて」いく。人と人の関係で描かれる性愛や官能の風景から遠く離れて、「水と熱の宿った物質」となるとき、人としての輪郭が解かれる。モノとのセックスから、自らが物質であるという認識へ、複数の物語を重ねてゆるやかに移行しながら、その過程でどんどん遠ざけられていくのは、性別のあるセックスである。人であるままに遠ざかっていくならば里帆のように、人であることからも遠ざかっていくならば知佳子のように、恣意的かつ強固に構築されたジェンダー規範から少しずつ脱出する過程が、具体的に試されているのである。

52
同書、192頁。

53
同書、195頁。

54
里帆を受け継ぐ小説として、「無性教室」(『小説野性時代』129、2014年8月)がある。校則で「性別が禁止」されており、校内では性別が身体の形では判断できないようにする「トランスシャツ」というタンクトップを着用する社会という設定で、「性別がない」セックスが描かれる。

55
『ハコブネ』、212頁。

56
同書、213頁。

57
同書、211頁。

58
同書、214頁。

さて、こうした村田沙耶香の試みは、どのように受け止められてきたのか。「たかだか性や性行為というミクロな観念に対する追究が、地球や宇宙というマクロなものとの合一へ帰着するというオブセッションの異様さ」[59]という全く無理解な批評もあるが、「そこで描かれているのは（いっけんそう見えるのとは違って）性的マイノリティの問題の「それ自体」ではない。問い返しと攪乱によって村田沙耶香が戦い続けてきたのは、性的マイノリティへのそれもふくめた、あらゆる抑圧をかたちづくる可能性のある「慣習」であり「当然のこと（とされているもの）」であって、いわば「認識そのもの」なのだ」[60]というように、規範への徹底した違和と抵抗の感覚を評価する論もある。里帆の性別を移す実験は、トランスジェンダーに直接関わる問題のようであるが、知佳子にも結ばれていく。それらの実践を、より広くジェンダー・クィアという概念でとらえたい。

ジェンダー規範への違和感は、決して村田一人のものではない。「女性として生きることに不自由さを感じたことがあるならば、自分の中の女性性を汚らわしく思ったことがあるならば、彼女たちは決して遠い存在ではないように思う」[61]、「息を詰めるようにして読み進み、ページを閉じた後、誉と有里を小説という作り話のなかに住む、架空の人物だと割り切れる人は幸福です。誉や有里と同じような「少女」と呼ばれた時代、私は私なりに息苦しかった。呪いもしたし恨みもした。蹲ったまま動けなくなった日もあった。紙一重だった、と思うのです」[62]というように、「女性」アイデンティティを示した評者たちは、村田の作品群の中に自らが面してきた困難を見出している。村田は、読者の中のジェンダー違和を引き出す。ジェンダーアイデンティティの形を多様化して示すと同時に、それぞれの場所における違和を結び合わせる可能性を、村田の小説は創り出している。

59
栗原裕一郎「村田沙耶香と村田沙耶香以後　果たして「性」は更新されたか」『ユリイカ』45-9、2013年7月。

60
市川真人「解説」『ハコブネ』集英社、2016年。

61
瀧井朝世「解説」『授乳』講談社、2010年。

62
藤田香織「解説」『ギンイロノウタ』新潮社、2014年。

4.「非一人間」への脱出：『地球星人』

江南亜美子は、村田の世界をマリオ・ペルニオーラの「無機的なもののセックス」の議論[63]と重ねて論じている[64]。ペルニオーラは人間を「感覚するモノ」としてとらえたうえで、「モノの世界」における「中性的セクシュアリティ」について論じ、「無機的なもののセックス・アピール」は「統一性を本質とみなす調和的展望にも、男性性と女性性との二元性に決定的な意義を付与する二元論的展望にも収まりきらない」[65]という。ペルニオーラのポスト・ヒューマン論には、たしかに村田の世界に通じる部分がある。ただし同時に、ペルニオーラが「性別」からの脱出を「モノ」としての経験に継起する状態として論ずるのに対して、村田の作品においては、脱出が目的として書かれていることは、

63
マリオ・ペルニオーラ『無機的なもののセックス・アピール』原著1994年、岡田温司・鯖江秀樹・蘆田裕史訳、平凡社、2012年。

64
江南亜美子「無機的な身体　村田沙耶香と／のエロティシズム」『ユリイカ』45-9、2013年7月。

65
『無機的なもののセックス』、174頁。

強調しておきたい。「性別」という規範とその抑圧という問題が、つねに物語の起点である。それゆえペルニオーラの議論とは異なり、「人間」という水準が普遍的に扱われることはない。人を普遍化しない差異には、階級や民族や人種やナショナリティなど種類があるが、村田が見据えているのは「性別」である[66]。そこからの脱出が繰り返し試みられているのである[67]。

さて、「星の欠片」という感覚は、脱出口を開くものとなっていたが、2018年に発表された『地球星人』[68]では、「宇宙人」としての感覚を軸に、ジェンダーとセクシュアリティに関わる規範や差別構造との闘争があらためて根本的かつ全面的に展開されている。最後に『地球星人』について考えつつ、村田沙耶香の現在を確認してみたい。

主人公である笹本奈月は、周囲に違和を抱いて生きている。彼女の違和が浮き彫りになる場所は、やはり家族である。以前の作品においても、規範の体現者としての母親や子供への愛情を欠落した母親が、主人公の孤立の元凶として度々登場してきたが、『地球星人』における奈月の状況はより苛酷なものとして描かれている。「家の中にゴミ箱があると便利だ。私はたぶん、この家のゴミ箱なのだと思う。父も母も姉も、嫌な気持ちが膨らむと私に向かってそれを捨てる[69]」というように、奈月は家族の構成員すべてから疎外されている。

奈月は、家族のなかで異質な自分を、ポハピピンポボピア星からやってきた「魔法少女」だと認識している。この作品では、「正常」と逸脱が、地球星人と宇宙人という二項対立で示されている。宇宙人の目は、地球の生活を、次のように映し出す。「私は、人間を作る工場の中で暮らしている。／私が住む街には、ぎっしりと人間の巣が並んでいる。」[70]、「私の子宮はこの工場の部品で、やはり同じように部品である誰かの精巣と連結して、子供を製造するのだ。オスもメスもこの工場の部品を身体にかくして、巣の中を蠢いている」[71]。工場では二種類の「道具」になることが求められている。「一つは、お勉強を頑張って、働く道具になること。／一つは、女の子を頑張って、この街のための生殖器になること」[72]。宇宙人である彼女は「洗脳」されて「工場の一部」となりきり、「皆が暮らしている仮想現実の世界」で「笑いながら暮らして」いくことを望んでいるが[73]、容易ではない。洗脳不可な「宇宙人の目」は、村田の作品の中で繰り返し語られてきた、「工場」の「道具」を連結し再生産する基盤装置としての家族という認識を、より鮮明に映し出している。

一方、この作品には、村田がはじめて組み込んだ問題がある[74]。「女の子」に対する性的搾取である。奈月は、塾の教師の性暴力にあう。性的被害は、奈月を彼女自身の身体から疎外することになる。彼女は、幽体離脱することでその時間を生き抜くが、口腔性交の被害にあったために味覚を喪失し、「待ってるからね」という声が「へばりつ」いて右耳の聴覚を失う。口も耳も

66
村田自身は「性別からの解放の欲求が、人間であることからの開放の欲求よりも前からあったのかもしれません」と語っている。(「インタビュー村田沙耶香　小説を書いて、「解放」へ向かう」『すばる』33-11、2011年12月)

67
江南は『殺人出産』『消滅世界』『コンビニ人間』から『地球星人』に至る近年の作品については、「セクシャリティの切り口だけで彼女の小説を評することは無効となった」として「二十二世紀の社会システムと人類の在りかた」を「幻視」するものとして評価している(「つぎの時代の夢を見る　村田沙耶香論」『新潮』115-10、2018年10月)。しかしながら、その「人類」の「社会」が、ジェンダーとセクシュアリティという問題系に焦点化して描かれていることは重視されるべきである。

68
『地球星人』。初出『新潮』115–5、2018年5月。単行本『地球星人』新潮社、2018年。

69
同書、39頁。

70
同書、36頁。

71
同書、37頁。

72
同書、41頁。

73
同書、157頁。

74
村田は、「性的被害を描くからには徹底的に描きたい」と思っていた、「絶対にモチーフとして消費したくはなかった」「強いモチーフを使って小説の強さに見せかけることは絶対にしてはいけない」と述べている(村田沙耶香・西加奈子「対談 人間の外側へ」『新潮』115-10、2018年10月)。さまざまな物語において悲劇の典型的素材としてレイプ表象が氾濫している現状を振り返れば、村田の姿勢は特筆に値する。

「故障」してしまう。

自己の身体を「生殖器」と認識することと、女児が性的に搾取されること、二つの問題はジェンダー化した環境における「身体」からの疎外という局面で重なりあっている。そのようにして奪われる身体は、そもそも身体が、自らの器でありながら、同時に外部に曝され意味づけられる場であることを、前景化する。ジュディス・バトラーは「身体とは、わたしたちが、自分のものであるかもしれないしそうでないかもしれないさまざまな観点に出会う場」[75]という。「身体は常に、個別身体の自律性を制限するような社会性と環境との様態に、ひき渡されている」[76]のであり、それゆえつねに被傷性を帯びた身体は、交渉と闘争の場となる。

『地球星人』における闘争は、孤独なものではない。奈月には、仲間が二人いる。一人は、いとこの由宇である。祖父母の住む秋級でしか会えない由宇だが、彼は、母親に宇宙船から捨てられたのを拾ったのだと言われて育ったため、「拾われてきた宇宙人」[77]というアイデンティティを持つ少年である。互いを同志として認めあった二人は、密かに「結婚」し、三つの「夫婦の決まり事」をつくる。「① 他の子と手をつないだりしないこと／② 寝るときは指輪をつけて眠ること／③ なにがあってもいきのびること」[78]。第三が、凄まじく重要であることは、明らかだろう。「なにがあってもいきのびること」というテーゼは、この小説全体を貫く倫理となる。幼い二人の間で交わされたこの決まり事は、奈月が苛酷な生を継続していく支えになる。しかし二人の関係は、「皮膚の中に行」[79]く行為としてセックスをしたところを大人に発見されて引き裂かれる。[80] 奈月の少女時代は、この時点でふつりと語り終えられる。

次の時間は、三十四歳の奈月から語り始められる。ここで、もう一人の仲間が登場する。奈月の夫、智臣である。二人は、「世間の目をすり抜けたい人たちが、仲間に呼び掛けたり、協力相手を探したりするサイト」の「すり抜け・ドットコム」で、「「性行為なし・子供なし・婚姻届あり」とチェック項目を入れて相手を探し」て結婚し[81]、「工場の隅で、生きるのではなく生き延びている」[82]。智臣は奈月の感覚に全面的に共感しており、それを「宇宙人の目」が「ダウンロード」されたと表現している。二人は、智臣の解雇を契機に秋級に行き、由宇と再会する。「大人」になった由宇は、「宇宙人の目」を持って生き続けている奈月に理解を示さないのだが、奈月と智臣がいったん「工場」に連れ戻され（人間たちは「仲良し」と表現されるセックスをして「子供を作れ」と脅迫的に迫る）、あらためて逃亡を図って秋級に戻る際には、由宇も自分自身の生きづらさを見つめなおし、二人と共に暮らすことを決める。仕切り直しの始まりに、智臣の提案で三人は離婚式を行う。奈月と由宇のかつての結婚と、奈月と智臣の結婚を、同時に解消し、三人は「夫婦ではない、まったく別の存在」[83]として、「三匹」のポハピピンポボピア星人として生活を始める[84]。

75
ジュディス・バトラー『戦争の枠組　生はいつ嘆きうるものであるか』原著2009年、清水晶子訳、筑摩書房、2012年、72頁。

76
同書、43頁。

77
同書、9頁。

78
同書、96頁。

79
同書、86–88頁。

80
ジェンダー化以前の存在としての子どものセックスもオルタナティブの一つとして示されている。

81
同書、105頁。

82
同書、108頁。

83
同書、207頁。

84
二ではなく三の関係性もオルタナティブの一部といえるだろう。他に「トリプル」（初出『群像』69-2、2014年2月。単行本所収『殺人出産』講談社、2014年。文庫『殺人出産』講談社、2016年）、「土脉潤起」（初出『群像』73-2、2018年2月）がある。

地球に居ながら「人間工場」を脱出するのである。

母星を持たない三匹の宇宙人は、「異星を生き延び」るため「アイデアを発生させて生きていく」ことにする[85]。前節で確認したように、村田は、恋愛のないセックス、性的でないセックス、性別のないセックスへと、ジェンダー化したセックスからの脱出を様々に試みてきた。その過程のヴァリエーションとして、モノとのセックスや地球とのセックスといった「非−人間」との関係が生み出されてきたわけだが、その延長上に登場した「宇宙人」は、ジェンダーへの帰属性を問われることのないオルタナティブな世界を創発するために選ばれた「非−人間」的存在である。「非−人間」が継続的に指向されてきたのは、「人間」にまつわる意味が異性愛男性中心に構成されているからに他ならない。意味を廃棄した三匹は「入れ物」となった「身体に従って」、電話線を切りスマートフォンを破壊し、衣服を捨てて裸で暮らし始める。身体の物質性は、食欲、排泄欲、性欲、それぞれにおける自由をつくりだす。

> 私は、性的なことはもう自分の人生には起こらないと思っていたし、それはもう故障したと思っていた。／けれど、初めて、自分の肉体が極限までリラックスした状態になり、同時にその入れ物に性的なものが宿っているのだった。（略）自分の肉体を、やっと取り戻したような感覚は、私にとっては幸福なことだった。[86]

食に関わる規範も消える。『コンビニ人間』の古倉恵子が小鳥を食べようとしたように、三匹は、互いを食べることにする。物質化した身体は、文化的な規制がなければ、十分に食の対象になり得る[87]。肩を、腕を、指を、ふうらはぎを、背中を、踵を、頤を、肱を、耳を、大腿を、三匹は互いに食す。そして奈月は味覚を取り戻す。「なにがあってもいきのびること」の声が右耳に響き、聴覚も取り戻す。「この日、私の身体は全部、私のものになった」[88]という。身体からの疎外の解消は、この小説のプロットの終着点を明るいものにする。

取り戻された身体は、主体の同一性を自足的に確立するものではない。それを象徴的に示すのが、三匹の妊娠である。互いを食べる幸福な時間から、次の時間の描写までには一行の空白があって、身体を食べ合った後の三匹がどのような状態にあるのか具体的には示されないが、はっきり述べられている新しい事態は、三匹が妊娠しているということである。妊娠は別の生が内臓の内に入り込むことを意味し、身体を単体としての生からずらす。また繁殖の連鎖の一部となることで、個体の時間からはみ出すことになる。加えて確認しておくべきなのは、オス、メスの区別なく、妊娠しているということだろう[89]。ジェンダーから解放されて、三匹は繁殖していく。

ここには、親密な生を共有しあう共同性といってよい関係が生み出されている。サイボーグ宣言から伴侶種宣言へと議論を展開してきたダナ・ハラ

85
同書、211頁。

86
同書、221頁。

87
人体の物質性を主題化した作品に、人間が死んだ際、生命式と称して遺体を食べる社会を描いた「生命式」（『新潮』110-1、2013年1月）や、死んだ人間を衣服やインテリアの素材にする社会を描いた「素敵な素材」（『GRANTA JAPAN with 早稲田文学』3、2016年2月）がある。

88
『地球星人』、241頁。

89
『殺人出産』『消滅世界』にも男性の妊娠が描かれている。

ウェイは、「『伴侶種宣言』は数多くの現実的生起の抱握を合生することによって可能になった、親族関係の主張である」[90]という。ハラウェイが伴侶種として具体的に指しているのは、「〔人間の〕自己とは一切関係がない」[91]犬たちであるが、「非−人間」的存在がひらく家族的関係性が志向されている点では、『地球星人』の世界に接続している。ジェンダー化した異性愛家族制度から逸脱した宇宙人である三匹は、小説の末部で三人を「救助」に来た地球星人をも、誘う。「今はそうでなくても、あなたにも、きっとこの形のあなたが眠っている。きっと、すぐに伝染しますよ」[92]。地球星人が宇宙人へと変化するか、あるいは地球人と宇宙人との共生にひらかれるか、いずれにせよ『地球星人』は、クィアな関係性へと私たちを誘う。

90
ダナ・ハラウェイ『伴侶種宣言　犬と人の「重要な他者性」』原著2003年、永野文香訳、以文社、2013年、17頁。

91
同書、20頁。

92
同書、245頁。

5. 村田沙耶香の想像力と破壊力

村田沙耶香の世界は、小説という形式によって示されている。村田には、十人産んだら一人殺せるという社会を描いた『殺人出産』や、生殖が完全に人工的になされるようになり、家族システムは利用され続けているものの恋も性欲も「家の外でする排泄物」になった世界を描いた『消滅世界』など、問題意識をデフォルメした虚構的設定が用いられた小説もあるが、本論で取り上げた作品は、リアリティのある設定から外部へとじりじり移行していく手法がとられたものである。小説という形式は、強靱な想像力が生成する非規範的でクィアな空間に具体性を付与することを可能にしている。繰り返し述べてきたように、小説の出発点に置かれた現実は、男と女の強固な二元論によって構築されている。恋愛と結婚と家族と性欲とセックスと生殖を連結させたところに、「正常」な生はおさめられている。それは私たちの現実と地続きである。その現実からの移動を推進するのは、想像力である。

村田が語るクィアネスはジェンダーを軸に展開し、男と女からなるジェンダーの二元構造が、反転され、転換され、越境され、重複され、消去され、さまざまな方向へ向かって破壊され続けてきた。『コンビニ人間』の古倉恵子や『地球星人』の笹本奈月は、身体とアイデンティティの関係を二元的に考えればシスジェンダーに組み入れられるだろうが、シスジェンダーにカテゴライズされることと、二元的なジェンダーシステムに違和や抵抗を感じることは矛盾しない。

フェミニストを自称する者の中にも、「女性」への抑圧と差別を覆すことを最重要視する立場をとる者がある一方で、ジェンダーの二元性そのものの窮屈さに辟易とし、それを多数化し流動化することを「女性」の差別の解消と接続して考える立場をとる者もいる。なにしろジェンダーによって構成された

文化的規範は、多岐にわたる上に強固で窮屈である。こうした窮屈さの自覚の程度は、多様で流動的なものである。違和の感覚の大きさは変化するだろうが、そうした違和を忘れないこと、見つめ続けることは、差異を前提としつつも異なるあり方を尊重し、ジェンダーの強制がない社会を構想していくための足掛かりになるはずである。ジェンダーの無い社会のみを理念に掲げる必要もないだろう。それはそれで、多様性や流動性のない社会になりうるからだ。パフォーマティブに構成されるジェンダーの形態は、現実をみれば明らかなように二つに限定されるものではないし、それを強制的に二つに分けるべきではないのと同時に、差異を無化すべきでもない。「女」と「男」という二つのジェンダーも含んだ、多様なジェンダーズを前提として社会を作り変えていくことへ向かいたい。同時に一言付しておくべきだろうと思うのは、多様性という言葉が、マジョリティにとって都合の良いものであっては本末転倒だということだ。森山至貴は「誰も差別せず、なんでもありだと認めれば十分」という立場が、無知を容認し差別を温存する危険性を指摘している[93]。複数のカテゴリーを創造していくことと、規範と差別の構造の問い直しが、ともになされるべきなのである。本論で検討してきた村田沙耶香の小説におけるジェンダー・クィアな挑戦は、わたしたちの世界をひらくはずである。

93
『LGBTを読みとく』、91–192頁。